

Title	漆器と自転車の意外な関係 - 初代・新家熊吉のイノベーション -
Author(s)	
Citation	JAIST社会イノベーション・シリーズ4, 37
Issue Date	2011-01
Type	Others
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/9587
Rights	
Description	

4 今後の展望 — イノベータとしての初代・新家熊吉

木 製リムの市場独占後、日英同盟締結による英国品流行と共に鉄製リムを使用したイギリス製自転車が発達すると、熊吉は長男三代次（後の二代熊吉）、次男正次と共に鉄製リム事業を展開していきます。鉄製リムの製造が軌道に乗った大正8年には「新家自転車製造株式会社」に改組して、今日の「新家工業株式会社」（本社：大阪市、東証1部・大証1部上場）へと繋がっていきます。

また熊吉はチェーン製造事業にも乗り出し、昭和8年に「国益チエン株式会社」を設立し、現在の「大同工業株式会社」（本社：石川県加賀市、東証1部上場）へと繋がります。

熊吉は、漆器業では、「木地くりぬき法」や「足踏ろくろ」の大量導入によって、新しい生産方式の確立というイノベーションを実現しました。そして漆器製造で培われた技術を活かして自転車用リムの製造方法を確立し、国内における新しい市場の創造というイノベーションをも実現しました。

これらのイノベーションは、熊吉が持つ山中漆器という伝統的産業に裏打ちされた高い技術力と、その技術を根子に自転車リムの製造可能性や自転車産業の

事業性を感じ取る洞察力とが結びついたことで実現されました。

熊吉の自転車リム事業の成功は、石川県下に同様のリム製造業者やチェーン、スポークといった自転車関連部品事業者というフォロワーを生み出します。

一方で熊吉は、漆器製造技術を山中漆器産地へ普及し、郡役所から度々表彰されており、道路の寄付や地域産業振興を目的とした銀行を設立するなど、地域への貢献も積極的に行ないました。

このような功績は、熊吉が技術革新だけではなく社会の活性化までをも含めたイノベータとしての行動の結果だといえます。

翻って現在の伝統工芸産業は、需要の落ち込みが続く、苦境に立っている状況です。

伝統工芸産業の活性化には、産業や地域を牽引するイノベータの存在が不可欠です。

JAISTでは、伝統工芸産地の活性化活動を支援すると共に、初代・新家熊吉のようなイノベータの事例やそれらの人が備える能力やスキルについて調査・研究を進めると共に、イノベータを育成するための教育を進めていきます。

JAIST 社会イノベーション・シリーズ 4

発行 2011年1月

発行所 国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学・地域・イノベーション研究センター
〒923-1292 石川県能美市旭台1-1 知識科学研究科棟Ⅱ7階

■本誌に関するご意見、お問い合わせ

TEL: 0761-51-1839 FAX: 0761-51-1767 E-mail: dento-secr@jaist.ac.jp



本誌は、文部科学省科学技術振興調整費
地域再生人材創出拠点の形成プログラムの
助成を得て発行しております。



北陸先端科学技術大学院大学

JAIST
SOCIAL
INNOVATION
SERIES

社会イノベーション・シリーズ 4

漆器と自転車の意外な関係 — 初代・新家熊吉のイノベーション —



今日、私達の日常の足として、またスポーツやレジャー用品として広く普及している自転車は、伝統的工芸品である漆器と深い繋がりががあります。それは、自転車用リム（車輪の構成部品）と漆器木地のろくろ挽き技術です。漆器と自転車リムの製造技術の接点には初代・新家熊吉という一人の漆器木地挽き業を営む職人が介在していました。漆器と自転車、一見全く異なる技術がいかに結びついたのか？その接点を結ぶ初代・新家熊吉はどんな人物だったのかを紹介します。

No.37

1 国産自転車の黎明期

私達が現在目にする自転車（セーフティ型という）が国内で広く普及し始めた明治 30 年代、そのほとんどはアメリカからの輸入品でした。また、当時の国内メーカーの多くは、宮田製銃所（現在の宮田工業株式会社）に代表されるようにその前身が鉄砲鍛冶や刀鍛冶といった鍛冶職人でした。これは、自転車に使用される金属の加工技術を持つ職人が鉄砲鍛冶や刀鍛冶に多くいたためだったといわれています。

そのため、国内の自転車部品メーカーの多くは阪神地域に集積していました。

2 創意工夫と経営の才覚を発揮した漆器業時代

初代・新 家 熊 吉（以下、熊 吉）は、元 治 元（1864）年 11 月 3 日に米穀商を営む新本孫吉の次男として山中村で生まれました。その翌年、熊吉は、嗣子のなかった漆器の木地挽き業を営む新家孫蔵の養子となります。熊吉は、13 歳で山中小学校の尋常科を卒業すると、養父・孫蔵の見習いとして木地挽き業に携わります。そして、3年後の明治 10（1877）年、熊吉はわずか 16 歳で家業の漆器木地挽き業を継承します。それは、養父・孫蔵が病弱であったため、早期に引退することを望んだことと、熊吉の経営者としての才能を見込んでのことでした。

経営者の才能を見込まれた熊吉でしたが、技術者としても才覚を発揮します。

特に、原料を効率利用する「木地くりぬき法」の考案や、従来 2 人で行なっていた木地挽き作業を 1 人で行なえる「足踏ろくろ」を大量導入するなど、漆器木地を効率的に大量に製造できる方法で大きな成果を挙げていきました。

熊吉は、漆器製造の合理化を進める一方、塗りや蒔絵職人を自家へ雇入れて漆器の一貫生産体制を整え、自社ブランドでの漆器製造を始めました。同時に自家の一部を改造して小売を始めると共に、都市部へ自ら販路拡張を進めていきます。当時の山中漆器は、製造問屋

そのような状況にありながら、自転車用のリム（車輪の構成部品）については、山中漆器の産地として有名な石川県江沼郡山中村（現在の石川県加賀市）の一人の漆器木地職人、初代・新家熊吉が全国トップのシェアを占めていきます。

初代・新家熊吉とはどんな人物だったのか、そしてなぜ漆器の職人が自転車リムを製造するに至ったのか、一つの技術を媒介として新たな産業へと躍進していった初代・新家熊吉の足跡を辿っていきましょう。

が木地や塗りといった仕事を専門の職人に発注して製品を作り上げる分業体制を取っていたため、自社ブランド商品を製造・販売することは山中漆器産地の中にある独特のものでした。



臨峰苑（加賀市山中温泉）にある
初代・新家熊吉の銅像

3 自転車リムとの邂逅

漆器商人として自社ブランド漆器の製造・販売に乗り出した熊吉でしたが、熊吉自身が後年「そのころ漆器があまり売れず弱っていた」と回顧するように、漆器は売れ行き不振に陥っていました。熊吉が売れ行き不振に悩む明治 35（1902）年、敦賀ーウラジオストック間の直接航路が開かれたため、熊吉は海外に販路を求め大陸へと渡ります。

商談の帰り道、横浜に立ち寄った熊吉は、船に山積みになっているものに目を留めます。それは、当時日本で普及し始めていたアメリカ製の自転車用木製リムでした。

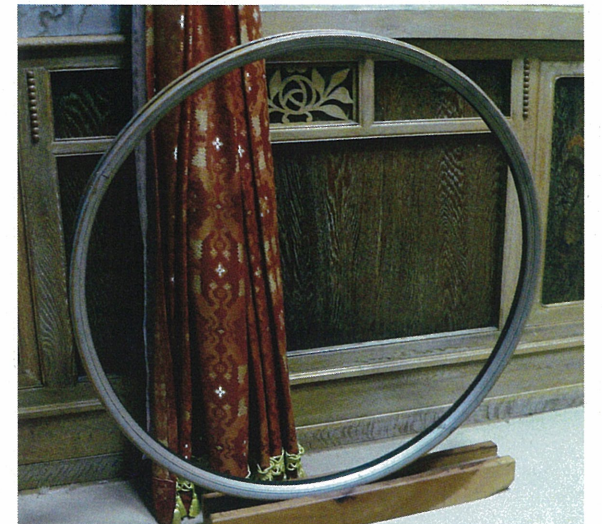
熊吉は、「これなら高い金を出して輸入しなくとも山中で作れるではないか」と、輸入品を参考にリムの試作を開始します。これは、山中漆器の製造で培われた漆器の木地挽き（ろくろ挽き）技術を活かせること、木地に使う原材を仕入易いこと、山積みで輸入するほど需要も高いことを読み取った熊吉の高い洞察力でした。

熊吉の読みは当たり試作結果は上々で、試作品を横浜や大阪で見せたところ好評を博したため、本格的に事業化に乗り出します。

翌 36 年に熊吉は、「新家リム商会」を立ち上げ、大阪から木製リムの製造経験を持つ職人を招いて、従業員 15 名と共に本格的にリム製造を開始します。木製リムの製造は、職人の指導を受けつつも、そのほとんどを熊吉自身が試行錯誤して独自に作り上げていきました（図 1）。同時に熊吉は、リムの接合部分の強度を高めるため、漆器と同様に布張りをして漆を塗りその上に塗装

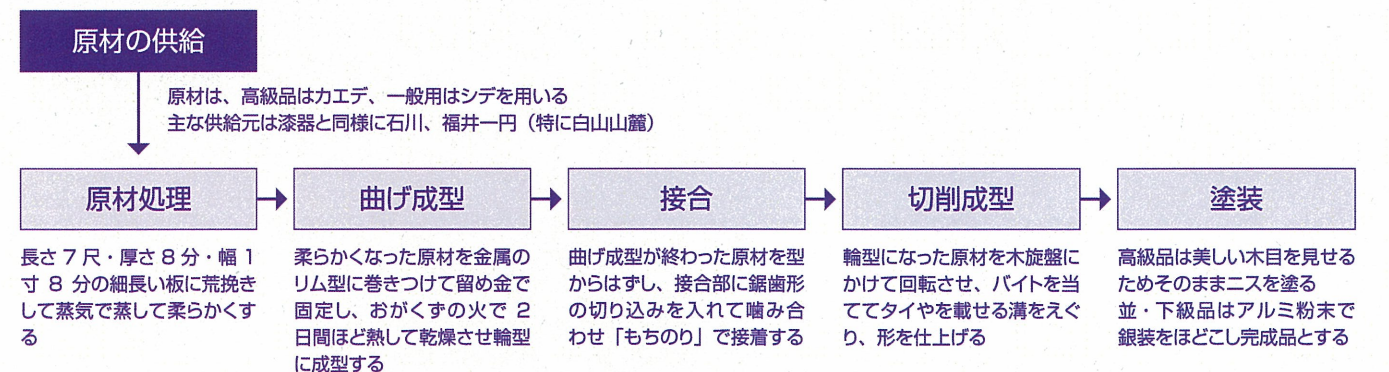
する工夫を施すことで、品質を高めていきます。こうした努力の結果、熊吉は木製リムの製造方法の確立に成功しました。

新家商会の木製リムは、従来の漆器木地ろくろ挽き技術の導入、既存の漆器原材仕入機構の利用、北陸農村部の低賃金労働力を活用したコスト競争力と、丈夫で高い品質とによって、輸入品の木製リムを圧倒し、明治 40 年代には国内市場を独占するまでに至りました。



新家商会製造の自転車用木製リム
無限庵（旧新家正次邸）所蔵

図 1. 自転車木製リムの製造工程



出所：「新家工業百年史」をもとに作成